

2021年5月31日(月)バ

老球の細道612号

5月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

篠田桃紅著『これでおしまい』の中に「春の風は一色なのに、花はそれぞれの色に咲く」という言葉があるが、人みんなそれぞれに生きなさいってこと。だとしてもコロナワクチン接種の申し込み、みんなそれぞれにやりなさいはひどかった。私は2週間半費やしてようやく予約がとれた。ワクチンに心と時間を奪われて季節の花々を見失ってしまった。

1・テレビから

◆「NHKのど自慢で俺よりうまく歌っているアマチュアがいることに気がつかなければだめだ」〈NHK『ここから北島三郎歌の哲学に迫る』〉：幼少の頃にお世話になったおばちゃんが大ファンだったサブちゃんも80歳を超える年齢になった。今でも演歌の帝王に君臨している。唯我独尊にならず、今でも絶大なる人気をキープしているのは、この危機感と謙虚さから来るのだろうか。

◆「前例がない、組織に通りません、誰が責任取るんだ”新しいことにチャレンジできる状態なのに日本人のポテンシャルを阻害している決まり文句。3人は絶対に言わなかった」〈BSテレビ東京：日本を創った明治の三賢人・岩崎、福澤、渋沢に見る革新力〉：このコロナ禍の今も、前例がない、誰が責任を取るかと言われると何もできなくなる。筋トレで筋繊維の一部が破壊される、それが修復されると以前より筋力アップする、超回復である。チャレンジして失敗してさらに大きくなる。何事もリスクを避けていては成長できない。

2・読書から

◆「老人には安心されるように、友だちには信用されるように、若者には慕われるようにありたい」〈金谷治著『人類の知的遺産④孔子』講談社〉：孔子の弟子が「先生の希望を聞かせてください」と言われた時の孔子の答えである。私も時々あちこちで字は違うが「講師」になることがある。私は若い指導者にバスケットボール談義を挑まれる日々でありたい。

◆「磐梯山の爆発に似て、野生の情火が何千年と会津の山野で培われているのではなかろうか。なにかのきっかけで燃え出すと、博士のような輝きをうむ。人々は結果にだけ眩惑され、潜在性に盲目となるようである」〈北篤著『会津嶺の国』木耳社〉：高校時代教えを受け、後に作家になった先生からいただいた著書を久しぶりに読んだ。会津人の潜在性の凄さをいつも語っていたことを思い出す。過去のキャリアより埋もれた潜在能力をどう引き出すか。

3・新聞から

◆「普通なんてどこにもない。それに縛られなければならない理由もない。なのに、普通を求める。もやとした空気が漂うような社会はもろく、危うい」〈朝日：社説余滴〉：かつて普通の女の子に戻りたいと解散したキャンディーズがいた。普通のおばさんになったと言った都はるみがいた。「皆と同じ」という価値観が幅を効かし、少数者であること、超一流へのワクワク感を持つ選手、コーチはどこにいるのだろうか。普通の爺様にはならず。